

# IT 時代における宗教活動について

—ミャンマーの上座部仏教活動の事例から—

## Current Missionary Activities in the Information Technology Era

- A Case of Theravada Buddhism in Myanmar -

ミヤツカラヤ Myat Kalayar

アルビン・トフラーの「第3の波」で予測された情報化社会が、インターネットをはじめとする IT (Information Technology: 情報技術) の急速な普及によって大きな変化をもたらしている。宗教界もその例外にもれない。本稿の主な目的は、IT を利用したミャンマーの上座部仏教活動の実態を把握することである。

キーワード: IT、宗教活動、ミャンマー、上座部仏教

### 1 はじめに

アルビン・トフラー (Alvin Toffler) が『第3の波』を上梓して 28 年、邦訳されて 26 年が経つ (Alvin Toffler : 1980)。彼が、「第3の波」と呼んだのは、「第1の波」の農業社会革命、「第2の波」の工業社会革命の、のちに情報社会革命によってもたらされたものである。この「第3の波」があらゆる分野において及ぼす影響は大きく、宗教の分野においても例外ではない。IT の発達と宗教との関りについて、日本においても先行研究が数多くなされている。たとえば、宗教情報リサーチセンター<sup>1</sup>やインターネット上の宗教情報、および宗教に関する相互行為の現状を把握するために構築したデータベースである ARI (Archive for Religions in the Internet)<sup>2</sup>などがある。現在、インターネットと宗教の分野における主な研究者として、井上順孝、土佐昌樹、田村貴紀、池上良正、黒崎浩行らの名前が挙げられる。ただし、これらの研究<sup>3</sup>は日本の神社や寺院を対象としている。

本稿は、「第3の波」時代において、IT を駆使したミャンマーの上座部仏教活動の現状を把握することを主な目的とするが、日本の宗教とインターネットについても少々触れる。現在、IT を駆使して宗教活動を行っている寺院の中でも、ミャンマーのヤンゴン市にあるティータゲー寺院 (Sitagu) やマハーシ瞑想センター (Mahasi Meditation Center) の活動を事例として取り上げる。その際、筆者が 2007 年冬に行った現地調査に基づいて、指導者やスタッフ、在家信者との対話、また、ネットカフェであった少年へのインタビュー、サイト、新聞記事などの資料を用いて考察する。

<sup>1</sup>現代社会の宗教状況についての正確な情報を求める各分野からの要請に基づき、宗教情報リサーチセンター (RIRC: Religious Information Research Center) が 1998 年 11 月に開設された。具体的な業務内容は、(1) 宗教情報のリサーチと提供、(2) インターネットによる情報提供、(3) 宗教問題に関するネットワーキングといった、三つを柱としている。

<sup>2</sup>國學院大学の「<http://ari.jcc.kokugakuin.ac.jp/>」が参考になる。

<sup>3</sup>情報通信技術の普及と現代の宗教変容として、次のような、連動する共同研究が平成 10 年に開始している。①「情報

## 2 IT時代の特質とミャンマーにおけるIT状況

### (1) IT時代の特質

一般的に宗教の活動とは、次のようなものであると考えられている。教会、寺院、モスクや布教所などでの説法や法話、また街頭での布教、聖地や本部に信者が集まって儀式を行うこと、祈りをささげることなどである。人と人とが実際に向かい合うこと、つまり、情報のやりとりや感情の確かめ合いが、宗教活動の基本である。しかし近代になって、新聞、雑誌、ラジオ、テレビ、CDやDVDと次々に新しい情報メディアが出現し、宗教団体が情報を伝える手段が多様化する時代を迎えるようになった。その典型的な例は、インターネット、携帯電話、デジタルカメラの幅広い普及である。

ラジオやテレビなどの放送活動が社会や文化に与えてきた影響の大きさはあらためて指摘するまでもない。生駒孝彰は著書「インターネットの中の神々」のなかで、アメリカにおいてはラジオによる伝導が早くから発展し、その後テレビ布教が社会に多大なる影響を与え、そして現在ではインターネット布教がさらなる力を持ちつつあるとしている(生駒孝彰 1999:p.19)。インターネットは、従来の情報伝達手段であるラジオ、電話、ファックス、テレビ、新聞、雑誌等、あらゆるものの機能を担っている。その普及には双方向性、手軽さ、個人化、時空間的距離に制約されないこと、情報伝達の速さ、情報の共有、低コスト、不特性多数への伝達が可能である等といった要素が複合して、その普及を助長していると考えられる。

生駒孝彰は同著書のなかで、「インターネットがもつとも大きな力を発揮すると思われるのが外国伝道の分野である」と述べている(同書:p.13)。筆者もその見解に同意するものである。特に国際電話料金が安いミャンマーにおいて、宗派の本部と外国の布教所や伝道者、信者と情報伝達にインターネットは大きな貢献をしているといえる。

### (2) ミャンマーにおけるIT状況

ミャンマーには2つのISP<sup>5</sup>がある。通信郵便電信省(MICT: Ministry of Communications, Posts and Telegraphs)の傘下にあるミャンマー郵政省(MPT: Myanmar Post and Telecommunication)と半官半民のバガン・サイバネット(BCT: Bagan Cybertech)社である(ミヤツカラヤ 2007:p.135)。ミャンマードメイン「.mm」が存在するが、「.mm」ドメインを取得するには他の国と比べるとコストが高い。

ミャンマーは他国と比べ、メディア規制が強いといわれており、情報を管理するためにさまざまな制限がなされている。例を挙げると、インターネットへの自由な接続が制限されていることやフリーメール(Webメール)<sup>6</sup>が禁止であることなどである。

しかし、2007年10月の僧侶による民主化運動の初期段階において、インターネットが果たした役割が大きかったのも確かである。現代の情報通信技術に代表される動画投稿サイト「ユーチューブ(YouTube)<sup>7</sup>」やブログ(blog)<sup>8</sup>がミャンマーのサンガー(僧侶の団体)によるデモを世界中にリアルタイムで伝えたことにより、世界がその情報を共有できるようになった。この事件によって、衛

---

化と宗教に関する研究—Computer Mediated Communicationを中心に—、②「コンピュータ・ネットワークの普及と宗教的行為の変容に関する調査研究」、③「宗教と社会」学会「インターネットと宗教」プロジェクトであり、次のURLが参考になる。「<http://ari.ijcc.kokugakuin.ac.jp/arireport.pdf>」

<sup>4</sup> テラワダ仏教(Theravada Buddhism)、南方仏教、小乗仏教とも呼ばれ、仏陀の教えを忠実に守ろうとする伝統的な正統派で、サンガ(僧侶の団体)を中心とする宗教である。

<sup>5</sup> ISPとはInternet Service Providerの略で、インターネット接続業者のことである。

星テレビやBBCなどのメディアを通じて、国民は知ることを体験し、インターネットに更なる興味を示した人が増加していると推測できる。しかし、インターネットを利用しているのは、関係者によると、約40万人（2007年11月現在）で、全人口<sup>9</sup>の1%にも満たない。

### 3 ミャンマー国内におけるITを利用した仏教布教活動の現状

現在ミャンマーでは、約90%の人びとが上座部仏教を信仰している。上座部仏教圏<sup>10</sup>において、サングが「涅槃」を目指すのに対し、在家信者が最も望むのはとりあえずの目標として、功德を積み、その多寡によって、少しでもより良い来世へ再生することである。仏教思想が浸透しているミャンマー社会において、法（Dhamma）をシェアすること、つまり、仏教に関する本やCD・DVDがプレゼントとしてよく利用されている。また、ミャンマーの書店では仏教書のためのスペースをかなり取っている。説法や瞑想の指導書、有名な僧侶の法話集が人気を集めている。この事実に呼応するかのようによりインターネット・カフェに行く若者の中には、メールやWebの閲覧をする人もいるが、主な目的はチャットやゲームである。筆者がヤンゴンのインターネット・カフェでネットサーフィンをしている大学生2人（男性）と知人の大学生5人（女性3人、男性2人）に「インターネットを利用した目的」について聞いてみたところ、「チャット」や「ゲーム」という答えがほとんどであった。「宗教関係サイトの閲覧のためにインターネットを利用したことがあるか」という質問に対しては「いいえ」という返事が返ってきた。つまり先述した理由から、ミャンマーでは仏教に関するCD、DVDや本などが簡単に入手できるため、わざわざ高い料金を払ってまで、インターネットを利用して仏教のサイトにアクセスしないとのことである。

ミャンマーの宗教省<sup>11</sup>によると、ミャンマーにおいてパゴダや僧院・尼僧院の数は、5万8千以上存在している。しかし、サイトを利用して情報を発信している寺院は50もないのが現状である。ほとんどのサイトは、信者たちによって功德を積むという目的のためや自分が帰依している僧侶のために開設されたものであるため、質も量も千差万別である<sup>12</sup>。ミャンマーの寺院のサイトが少ない理由として考えられるのは、ミャンマーにおける仏教徒は血統の信者<sup>13</sup>（Miyoe Phalar Buddha Barhar）であり、勧誘する必要がないこと、ほとんどの僧侶はインターネットそのものを知らないこと、情報リテラシーに無知であること、インターネットが使える環境が整っていないこと、上座部仏教の基本的な考え方は「苦」から解脱するために出家するため、世俗に関する情報に乏しいことなどである。

また、筆者の知りあいの僧侶によると、僧侶はインターネット利用とは、「情報収集、布教活動、海外にいる信者間との連絡手段である」とみなしていると述べる。さらに、インターネット関連の会社で寺院のサイトをしているアルファ社<sup>14</sup>の責任者であるY氏にミャンマーの寺院のサイトについて訪ねたところ、以下のような答えが返ってきた。

<sup>6</sup>たとえば、YAHOO メール、Hotmail、egroup、nifty である。

<sup>7</sup> 2005年2月に設立された米国のネットベンチャーであるユーチューブ社が運営する動画共有サイトのことである。会員になれば、誰でも動画画像ファイルをアップロードでき、動画の閲覧は、会員でなくても可能である。サービスを利用するのに、料金は不要であり、各テーマの10分程度の動画を無料で見ることができる。

<sup>8</sup> 「ブログ」とは「ウェブログ（weblog）」を略した言葉であり、無料で簡単に情報発信ができるサービスのことである。

<sup>9</sup> ミャンマーの人口は（2004年現在）約5300万人である。The Government Of The Union Of Myanmar, Ministry Of

「現在、ミャンマー寺院のサイトのほとんどは僧侶や指導者の依頼で作成されているのではない。その僧侶や寺院に帰依している信者が自分の意志で僧侶や寺院の紹介をしているのである。あるいは、経済的に裕福な在家信者がサイトを製作する会社に依頼して情報を発信している。ホームページ作成・運営に関わる費用やプロバイダ料・通信料金などは信者が負担している。そのため、質も量也多岐にわたっており、アップグレードや定期的にサイトの内容のメンテナンスを行っていないサイトも数多く存在する。」

つまり、寺院のホームページと言っても、ほとんどは僧侶や代表者が作成し運営しているわけではない。信者たちがサイトを設置した目的は、自分が信じている宗教を一人でも多くの人と共有したいという思いが原点にあると考えられる。むしろ海外にいる信者が英語で作成し、外国にあるミャンマーの僧院や瞑想センターの情報、ネットワークを一つのサイト<sup>15)</sup>にまとめたものが多い。

黒崎浩行は「諸宗教のインターネット利用」<sup>16)</sup>のなかで、サイトの内容を、以下のように四つに分類し特徴的なものを提案している。

①「自己開示」

自己紹介、教典や説教などの情報提供で、ほとんどの宗教関連サイトがこれに当てはまる。

②「世論へのアピール」

米国の宗教団体・連合体のサイトに多くみられる宗教の社会活動である。

③「ヴァーチャル儀礼」

参拝・墓参・占い・祈祷などの場を提供する。

④「集会・相談」

BBS（掲示板）・身の上相談・カウンセリングなどの、時間的・空間的に拡張されたパーソナルな結びつきをもたらす。

また、宗教行為の可能性として田村貴紀は、「宗教関連サイト主催者へのアンケート調査結果報告」<sup>17)</sup>中で、①「言葉による宗教性」、②「聖地へのアクセス可能性」、③「オンラインカウンセリング」といった3つのタイプを挙げている。「① 言葉による宗教性」とは、ホームページの内容の主な部分がテキスト（文字情報）によるものをいう。文字表現によっていかにして宗教性を表現できるかが宗教行為のポイントとなるという指摘である。「② 聖地へのアクセス可能性」とは、インターネット上で墓参りや聖地巡礼をすることは可能かという問題である。「③ オンラインカウンセリング」とは、インターネットを通して個別的な宗教相談に応じることである。

黒崎浩行や田村貴紀が挙げているように、充実した寺宗教関連サイトには、境内や施設、祭事や崇敬の案内などといった寺院や瞑想センターの紹介、つまり「自己開示」、や宗教の社会奉仕といった「悩み相談」が必要とされる。しかし、現在ミャンマーの仏教関係のサイトのほとんどは、信者によって開設されているため、僧院や僧侶の紹介の内容が最も多い。また、ほとんどのサイトは僧侶によるものではないため、他の宗教サイトで見られるような「オンラインカウンセリング」といっ

---

National Planning And Economic Development, *Statistical Yearbook 2004*, Central Statistical Organization, Yangon, MYANMAR 2004, p.408) を参考した。

<sup>10)</sup> 上座部仏教を信仰するのは、スリランカ、ミャンマー、タイ、ラオス、カンボジアなど、主に東南アジアの国々である。

<sup>11)</sup> ミャンマーの宗教省のサイト、「<http://www.mora.gov.mm/>」

<sup>12)</sup> しかし、宗教省の直轄下にある国際テーラワダ仏教宣教大学 (International Theravada Buddhist Missionary University : ITBMU) は政府による開設したもので、関係者によると、ITBMU に入学している留学生の中には、ホー

た悩み相談のようなサイトは見当たらない。

以上のように IT を利用した国内での布教活動は、信者のニーズに答えていないことがわかってしまう。

#### 4 ミャンマー国外に対する IT を利用した仏教布教活動の現状

ミャンマーを含め上座部仏教関係のサイトには以下の 3 つの側面がみられる。

- ① 欧米などの海外移民先の寺院・宗教集団による英語サイト
- ② 欧米の知識人や仏教者・出家者が、欧米を拠点にして自らの宗教活動の一環として作成している個人サイト。このサイト<sup>18</sup>は、グロッサリーや経典の電子テキストや電子説法などの内容が充実しているため、総合性が高い。
- ③ 上座仏教圏の国々の内部における寺院・宗教集団による母国語・英語サイト。このサイトは、寺院や世俗者による仏教組織などが作成している。

インターネットをめぐる環境は、日々刻々と変化しているため、ミャンマーの都市部にある名利や若くて知識の高い僧侶、外国に行ったことのある僧侶たちはインターネットを利用し、宗教活動や情報収集に役立てている。また、外国に支部を設けて外国にいる信者むけにオンライン寄付を受け付けており、寄付した信者のリストを公開している。中でもティータゲー(Sitagu)<sup>19</sup>寺院は有名である。ティータゲー僧正は、パゴダなどの宗教建築物の建立、食事の喜捨、得度式、瞑想の指導や儀礼などの宗教的行為と同時に、水道関係工事、病院、教育支援など、本来ならば政府が行うとされる世俗的事業も行っている。こうした事業は一般人の布施によってまかなわれている。従来のように現地に行かなくても、オンラインで寄付ができることによって一般人にも功德が得られるだけでなく、外貨の獲得にもつながる。筆者もクレジットカードを利用し 10 \$ を寄付したところ、3 日後にサイト上に記載された(図 1)。このサイトはアメリカにいる信者によって設置されているため、オンライン寄付ができる。さらに、ユーチューブなどを通じて長老の法話を動画配信したり、行事やイベントを定期的にアップグレードしている。

一方、ウィパッサナー瞑想を普及させるため、国内にいる教団の信者が開設したマハーシ瞑想センター(Mahasi Meditation Center)<sup>20</sup>のサイトでは、瞑想の基本的なマニュアルを中国語、韓国語、日本語、英語、ドイツ語、フランス語、ビルマ語で流している(図 2)。マハーシ瞑想センターには外国人が多く参加しており、筆者が韓国人の参加者に「マハーシ瞑想センターのことをどこで知ったか」について聞いてみたところ、「インターネットから」と答えている。また、教団のホームページ、信者や体験者のブロックを見て参加したという。

日本には「日本テーラワーダ仏教協会」<sup>21</sup>という上座部仏教の協会があり、協会の活動案内を中心に、上座部仏教に関するさまざまな情報をメールマガジン形式で月に数回配信している。さらに、説法集や瞑想の仕方、Q&A サイト、仏教に関連するサイトのリンク集、長老の法話を無料でダウンロードすることも可能であり、充実したサイトであるといえる。

---

ムページを見て入学した外国人であるという。

ITBMU のサイト、「<http://www.itbmu.org.mm/>」

<sup>18</sup>ミャンマーにいるほとんどの仏教徒たちは仏陀の教えを宗教として受けとめるだけではなく、祖先から受け継いだ文化として日々の生活の中で実践している。

<sup>19</sup>アルファ社、「<http://www.alpha.com/>」

<sup>20</sup>イギリス居住のミャンマーの仏教徒が開設したサイトの「<http://www.nibbana.com/>」が充実している。

以上のように対国外へのITを利用した布教活動は、対国内のそれとは対照的に非常に充実しているといえるだろう。

#### List of Online Donors 2008

02/23/2008	Melvin Tan - Annual Maintenance Fee	\$120
02/20/2008	Myat Kalayar - City Water Project Fund	\$10
02/16/2008	Tin Hla - General Fund	\$155
02/16/2008	Tin Hla - Annual Maintenance Fee	\$120
02/10/2008	Tin Hla	\$1000
02/09/2008	Alan J Cook	\$120
02/07/2008	Melvin Tan	\$1000
02/02/2008	Selwyn P Thint	\$1000
01/31/2008	Kyaw Z Win	\$9
01/30/2008	Ashin Ariyadhamma	\$36

#### List of Donors in 2007

Date	Contributor	Amount	Purpose
1/1/2007	Michael	\$50.00	Shwezigone Pagoda
1/1/2007	Michael	\$50.00	Water Project

図1 アメリカ支部にあるティータグー寺院寄付サイト

出典：「<http://www.sitagu.org/donate/>」、2008.2.25 アクセス

説明：サイト上でクレジットカードの番号を記入し、喜捨の目的や寄付する対象分野を選択する

<sup>16</sup> 「<http://www.capnoir.jp/doc/js19981026.html>」

<sup>17</sup> 亀野哲也の「インターネットを利用した布教の実態調査— 電子メールによるアンケートより—」平成9年調査・平成9年度曹洞宗化学大会発表要旨を参考にした。

亀野哲也のサイト、「<http://teishoin.sakura.ne.jp/kekka.html>」

<sup>18</sup> たとえば、e-ダマ・サイト「<http://www.edhamma.com/>」では、お経が100ぐらい用意されており、自由に聞くことができる。サイトは英語とビルマ語がある。また、イギリス居住のミャンマーの仏教徒が開設したサイトの「<http://www.nibbana.com/>」が参考になる。

<sup>19</sup> ティータグー寺院のサイト、「<http://www.sitagu.org/>」

<sup>20</sup> マハーシ瞑想センターのサイト、「<http://www.mahasi.org/>」

<sup>21</sup> 日本テーラワダ仏教協会のサイト、「<http://www.j-theravada.net/>」



図2 マハーシ瞑想センターのホームページ

出典：「http://www.mahasi.org.mm」、2008.2.10 アクセス

## 5 おわりに

以上のように、インターネットのCMC（Computer-Mediated Communication）を利用した上座部仏教の宗教活動を見てきたが、全体的にインターネットを使った宗教活動は未成熟な段階にあり、寺院におけるインターネットへの対応は非常に遅れていることがわかっていく。なぜならインターネットを利用した宗教活動は現段階において、ミャンマー国内にいる信者を対象としていないからである。その理由として、ミャンマーにおけるインターネット接続のための手続きが簡略でないこと、通信費がまだ高いことなどがあげられる。また、ミャンマー国内のインターネット利用者は10～30代を中心とした若者層であるが、国内にあるほとんどの宗教サイトは、国内の「若い世代へのアピール」よりも、海外に居住している仏教徒や仏教者を対象としていると考察できる。しかし今後はインターネット人口の増加に伴い、僧院や瞑想センターもインターネット利用の度合いを高める傾向にあると思われる。

## 参考文献

- Alvin Toffler (1980)、THE THIRD WAVE、William Morrow & Company, Inc.1980.  
徳岡孝夫監訳 (1982)、「第三の波」、中構文庫  
The Government Of The Union Of Myanmar (2004)、Ministry Of National Planning And Economic Development、*Statistical Yearbook 2004*、Central Statistical Organization、Yangon、MYANMAR 2004  
生駒 孝彰 (1999)、『インターネットの中の神々—21世紀の宗教空間』、平凡社新書  
池上良正・中牧弘允 (1995)、『情報時代は宗教を変えるか』、弘文堂  
井上 順孝責任編集・国際宗教研究所編 (2000)、『インターネット時代の宗教』、国際宗教研究所、新書館  
井上 順孝 (2003)、『IT時代の宗教を考える』、中外日報社  
ミヤツカラヤ (2007)、「ミャンマーにおける情報技術の現状について」、『長崎短期大学研究紀要』、第19号、p.135  
土佐 昌樹 (1998)、『インターネットと宗教 — カルト・原理主義・サイバー宗教の現在 —』、岩波書店

## 参考ホームページ

- 全地球規模で仏教情報を扱う便利なサイト、  
「<http://www.buddhanet.net/worldldir.htm>」  
宗教情報リサーチセンター、  
「<http://www.rirc.or.jp/about.html>」  
田村 貴紀 (1999)、pdf「CMCと宗教研究の視角」『年報筑波社会学』vol.11、pp.19-41  
「[www.geocities.co.jp/Technopolis/3248/cmcr\\_shikaku.pdf](http://www.geocities.co.jp/Technopolis/3248/cmcr_shikaku.pdf)」よりダウンロード  
仏教関連のリンクや情報源のリストのサイト、  
「<http://www.dharmanet.org/>」  
外国にいるミャンマーの信徒が開設したホームページ、  
「<http://www.nibbana.com/>」  
日本テーラワダ仏教協会、瞑想の方法やスリランカ高僧の法話や教義解説があり、充実しているといえる。  
「<http://www.j-theravada.net/>」  
瞑想センターに関しても世界にある瞑想センターの情報、写真等が搭載されている。  
「<http://www.buddhanet.net/imol/medburma.htm>」、  
グリーンヒル瞑想研究所、ヴィパッサナ-瞑想実践方法—歩行瞑想マニュアルがある。  
「<http://www.satisati.jp/2-2-1page.htm>」、  
ミャンマーのIT状況がわかるサイト  
「<http://www.bagan.net.mm>」  
ミャンマーの宗教省のサイト、  
「<http://www.mora.gov.mm/>」  
マハーシ瞑想センターのホームページ、中国語、韓国語、日本語、英語、ドイツ語、フランス語、ビルマ語で瞑想の指導が受けられる。



IT 時代における宗教活動について

「<http://www.mahasi.org.mm/pvm.html>」

上座部仏教のサイト、読経が流れるようになっている。

「<http://www.myanmar-dot-com.com/BDHDefault.aspx>」